回覧

［歳時記　号外］

# わたしの秋祭り

大野神社

きんもくせいの香る ひんやり肌寒い10月の秋祭り

2年連続で、樂屋台や神輿巡行などができずに

寂しく過ぎました。

**愛すべき地元口大野の 大切な伝統行事・・・**

ひとりひとりの秋祭りの思いを

これからも忘れることなく大切に。

そこで、今も忘れない秋祭りのエピソードを

こそっときいてみました。

ここでは、かたいお話しはナシで、

ゆる～くさらっと読んでいただいて

「わしも…」「わたしは…」と それぞれの秋祭りを

思い出してもらえたら とてもうれしいです。

それでは はじまりはじまり・・・

## 『テンション爆上がり』

ずいぶん前は、お宮さんの参道におもちゃなどの店屋台が並んでいて、とてもにぎやかでした。

そこには祭衆に参加できない女の子たちが着物を着せてもらい、みんなで見に来ていました。そんな普段とは違う女の子の華やかなギャラリーに、男の子はいっきにテンションも上がり、いいところを見せようと参道でそれまで以上に張りきったものです。

## 『やらかした花方』

各家庭に御花をいただきにまわる花方。とある家を訪ねたところ「酒を飲まな花はやらん！」と言われ、それならばと勢いよく飲んだものの、頂けたのは酒パンチ。その花方は、あえなくノックダウン。そのおかげで、ほかの花方の仕事は増え、その後大変だったのは言うまでもなく・・・。

そんな迷惑をかけたおっちゃんがおったなあ～。それが誰かは、おっちゃんの名誉のためにここではふせておきますね（笑）

## 『堂々早退』

小・中学生時代といえば、祭りの日に先生が「今日は〇〇君と〇〇君はお祭り参加なので早退してください。」とみんなの前で、名前を呼んでくれました。僕は、帰れない同級生たちの「えーなぁ～」のうらやむ大合唱を横目に、ランドセルを勢いよく背負って満面の笑みで学校を後にしました。

祭りの時ならではの特権。あれはうれしかったなぁ。

## 『お菓子まみれの僕』

太刀振りにまわるとたくさんのお菓子がもらえました。もらったお菓子を次々に衣装の中に入れました。タツケにも入れたのですが、いざ太刀振りをする段になって足が曲がらない。あせった僕は、必死になってひざ裏でお菓子をつぶし、何とか踊りきることができました。

家に帰って衣装を脱いだところ、みごとに体も衣装もチョコまみれ。それを見つけた母親にこっぴどく叱られた祭りの夜でした。

それも祭りの楽しい思い出です。

# 『オリンピックと秋祭り』

昭和三十九年十月十日（土）の秋祭りは、明治の樂番でした。この年は、オリンピックの開会式と秋祭りがかぶってしまいました。さてどうしたでしょう…。

秋祭りは、九日の午前から行い、十日はオリンピックの開会式を見るためにお昼で打ち上げとなりました。

しかし、学校は、九日午前からの休みにはなりませんでした。私が小学校四年生。旧口大野小学校の二階の教室で、担任の小谷先生の授業を受けていると樂屋台の太鼓の音が聞こえてきました。先生の話そっちのけで窓の外を見ると、ちょうどグラウンド横の道からお宮さんに上がっていく屋台が見えました。子どもの青い法被はなく、大人の法被だけの集団。

子ども心になんだか寂しく感じて、今もその光景が目に焼きついています。

# 『あるおっちゃんのへんぼう』

宵宮で元気だったおっちゃんが、本宮の当日は、なぜか人が変わったようにおとなしくなっていました。

よくよく見れば、鉢巻の下にハチマキ（包帯）。なんと宵宮で酒に酔って川溝にドボーン。頭にケガをし、家に連れて帰られたおっちゃんは、奥さんに相当絞られ怒られた模様。意気消沈のちっちゃくなったおっちゃん。

何はともあれ、たいしたケガでなくてよかったよかった。

## 『長蛇の列』

かれこれ六十年ほど前は、樂の練習をするとなると、子供だけでもゆうに五十人以上が集まりました。そんなわけで、一度打ち終えてしまうと長い列の一番後ろへまわり、太鼓の場所さえ見えなくなるほどでした。太鼓を打ちたくて仕方ない子供たちは、いつまわってくるかわからない順番に、だらけ顔やらふてくされ顔。それでも、練習が終わりみんな集合となって、子供におやつが配られると、とたんにうれし顔に笑い顔。

子供達が多くてにぎやかだったこんな時代もあったなぁと思い出します。

## 『獅子に食べられる』

私が、口大野に越してくる前の小学低学年の頃のはなし、母に連れられて、地元の獅子踊りを見に行きました。

獅子と剣を持った人が向かい合って激しく舞うその様子が楽しそうで夢中で見ていると、赤い顔をした獅子が突然母と私のところへやってきました。母におんぶされていた私に向かって、それはそれは大きな口を開け私を食べようとしました。私はびっくりしたのとあまりの恐怖に泣き出しました。

半世紀以上がたち、人口の減少と共にそういった祭りを見られる機会もなくなり、大変なつかしい思い出となっています。いつかまた、昭和の古き良き当時の祭りが見られたらと思っています。

## 『太刀振りランボー』

剱鉾町内には、若者以外にも太刀振りで役太刀バリバリのおっちゃんがおります。

通称「剱鉾のランボー」。

驚異の身体能力を持つそのランボーが、六十歳を過ぎた今でも役太刀ができるのか気になるところです。

ちなみに、普段は太刀を草刈り機に持ち替えて、地域のために大活躍のランボー！

地域のみんなは、あなたに大変感謝しとるでぇ。

## 『お母ちゃんの背中のぬくもり』

六・七歳のころ、樂番の二日目の夕方、ちょうど疲れ切った頃にお母ちゃんが屋台のところへ迎えに来てくれました。

「なんだ　あまえとるんか。」町内のおじちゃんに言われ、ちょっと恥ずかしかったけれど、おんぶしてもらいました。その時のお母ちゃんの背中のぬくもりは、今でも秋祭りがくるたびに思い出します。

アラ古希のありんこさんより

**わたしの秋祭りは**

**これからも**

**・・・つづく。**

発行：大野神社総代会　連絡先 TEL 64-2137

令和３年 11 月 25 日